

言語分析における職能の取り上げ方

——「だろう」「でしょう」を中心として——

田村 すゞ子

1. 序論——言語の分析・記述

一つの言語の文法を記述するには、次の二つのことをする必要がある。

第一は、与えられた言語形式(単に「形式」ともいう。音韻的な形と意味とが連合したもの。文、フレーズ、単語など。「フレーズ」とは二つ以上の単語が統合した形式を言い、いわゆる節 clause を含む。)を分析して、内部構造を調べることである。そしてその形式を構成している要素のそれぞれが果たしている役割によって、どれが主語であるとか、どれが述語であるとか、あるいはどれがどれにかかる連体修飾語であるとか、というようなレッテルをはる。そうしてこの言語にはどんな構造があって、それらの構造がどのように組み合わさって、全体としてどのような体系を形造っているかということをはっきりさせる。

第二は、言語形式の構成要素となる材料としての形式(単語、形態素など)の性質を調べることである。ある特定の与えられた形式の構成要素となっている形式ではなく、その言語におけるいろいろな形式の構成要素に、いつでもなり得べく用意されている形式の、性質を調べてこれを記述することである。つまりどんな形の、どんな意味の形式が、ほかのどんな形式とどのような関係で結びつき、その結果どんな形式を作るか、ということをはっきり調べるのである。

いわゆる新しい言語学、すなわち generative grammar (生成文法) で syntax と呼ばれているものが扱うのは、この第一のものにだいたい相当すると言える。ただし generative grammar における syntax の場合は、

根本的な姿勢がこれとは違っている。というのは、いま述べたように調査し、分析し、それを整理してそこから結論を出すというやうないわゆる帰納主義ではなく、先に仮説を立て、理論を組み立てて、これを演繹的に立証しようという考え方なのである。いわゆる古い言語学、すなわち構造言語学の方法はどちらかというと帰納主義的である。私も主として帰納法を使う。だから、言語学と言えは generative grammar をさすかのように一般に思われている今の時代においては、私のような者は言語学者を代表してこういう席でお話をするのにはふさわしくないかもしれない。しかし私自身としては、ほかのすべての人がそうであると同様に、自分の好きな方法が最も良い方法だと確信している。もちろん演繹法も使う。調査して得た資料を整理する段階では、演繹的にやらないと、きれいな体系が見えてこないし、仮説を立ててそれを目やすに追加調査をすることによって、新しい事実がわかってくる場合もある。これをやらないでむやみに帰納主義に徹してしまって、調査して得た資料をただ客観的に扱っているだけでは、目をあけて見れば見える体系に対して目をつぶっているようなものだと思う。そういう行き過ぎた帰納主義、客観主義にも、私は賛成できないのである。

さて、上述のように、姿勢はちょっと違うにしても、内容から言えば、近頃はやっている syntax に相当するのは主に第一の仕事で、第二の仕事は syntax の中にはほとんどはっていない。syntax はしばしば「文法」と訳されることがあるが、文法即ち syntax だと考えたら大変なまちがいで、syntax だけでは文法全体の半分にも足りない。第二の仕事、すなわち文などの言語形式の構成要素となり得る材料としての個々の形式を、綿密に調べて記述することが、地味ではあるが、非常に大切なことだと思うのである¹⁾。

いわゆる古い言語学すなわち構造言語学が主として行なってきたことの

1) このことについてはすでに田村すゞ子「形態論 I, II」[『ことばの宇宙』3, 4(テック, 1968)] で述べた。

一つは、文や単語などといった形式を要素に分割することであったが、そればかりではなく、要素的形式の記述ということにも、強い注意を向けていた。構造言語学で「形態論」morphology というのは、形態素 morpheme (最小の言語形式)を取り出して、個々の形態素を記述すること、というふうに考えられていた。しかし、注意を向けていた割には、この種の記述はあまり進んでいるとは言えない。日本語に関しては、国文法とか日本文法とかいう名前のついた本がずいぶんたくさんあり、その中の「助動詞」「助詞」などの章には、個々の形式の意味とか接続のしかたの記述が見えている。しかしこれもまだまだこれからという感じがする。というのは、第一に記述が網羅的 exhaustive でなく、第二に体系が十分に把握されていないからである。

最初に述べた第二の仕事というのは、具体的にはどういうことをするかというと、まず記述すべき形式を取り出す。この「取り出す」ということがむずかしいので、これが一つの問題点でもあるのだが、それは今回の議論の対象ではないので、いまは、そういう形式を取り出したとして論を進める。取り出したら、その形式の形と意味と職能を記述するのである。

形というのは、まず音韻的な形で、たとえば「箱」は単独で /hako/ という形を持っているということである。ところが言語の材料たる形式としての「箱」は、単独でばかり用いられるのではなく、より大きい形式の中にはいっても現われ、そのときに違った形をとることがある。たとえば「本箱」「茶箱」「チョーク箱」「道具箱」「おもちゃ箱」「衣装箱」「小箱」などの合成語の中では、この同じ「箱」という形式が /bako/ という形をとる²⁾。こういったことも「箱」の記述の中に含まれるわけである。もっとも /h-/ が合成語の中で /b-/ に変わるのは「箱」の場合に限らず、鉢——植木鉢、火——口火、舟——丸木舟など多くの例がある。こういう場合は、一つ一つの例を別々に扱うのではなく、この /h/ から /b/ への交替を、これらに共通の規則として、まとめて記述するのが賢明であることは言うま

2) 「本箱」の /bako/ は単独の /hako/ とは別の形式だとする見方もある。

でもない。しかし注意すべきことに、単独で /h—/ という形を持つ形式の中には、合成語の中でも /h—/ のままのもの、/n/ のあとでは /p/ になるもの、前につくものによって /h—/, /b—/, /p—/ と三通りの形をとるものなどいろいろある。従って「箱」の /h/ がどういう交替をする種類のものかということは、「箱」という形式の記述の中で明らかにされる必要がある。なお、形の記述の中にはアクセント素およびアクセント素交替に関することもある。

次に意味の記述について言うと、ある形式の意味を、ほかの形式を使って言いかえただけでは不十分であって、その形式の使い方を調べ、それと関連のあるほかの形式との共通点と相違点を調べあげることによって、その形式の意味を明らかにすることができる³⁾。

こういった、形の問題も意味の問題もおもしろく、また重要でもあるのだが、ここでは機能の問題に焦点をしばってお話する。

2. 言語形式の機能

「機能」というのは文法的な性質のことである。たとえば「行く」という形式(これを {iK} と表記する。語尾の u をとり除いたもので「行く」という意味を持ち、あとにつくものによって /ik/ になったり /iq/ になったり /iki/ になったりする)は、「前に“だれが”という行為の主体を表わす形式、および“どこへ”という移動の向かって行く方向あるいは行先を表わす形式を必要とする」という性質を持っている。もっとも「だれが行く」とも「どこへ行く」とも言わないで、ただ「行く」とだけ言う場合もしばしばある。しかしこれは「言わなくてもわかる場合はなるべく言わない」という、日本語東京方言における一般的傾向から説明できることであって、そういう場合は、もともとあるものだが省略されている、と見

3) この問題を論じ、また意味の記述を試みたものとしては、たとえば国広哲弥『構造的意味論』(三省堂, ELBC 言語叢書, 1967)、服部四郎『英語基礎語彙の研究』(同, 1968)、国広哲弥『意味の諸相』(同, 1970) などがある。

ることができる。{iK} は上述の二種の成分を必要とするほかに、「山道に行く」と言うこともできるし「だれだれといっしょに行く」「いつ行く」「どうやって行く」「何の目的で行く」等々、いろいろなコンテクストにはいることができる。{iK} の前に移動の向かって行く方向や行先を表わす形式(「東京へ」「東京に」「東京のほうへ」「東京に向かって」「東京まで」等々)あるいはまた移動の場所を表わす形式(「山道を」)がついたものは、全体で、そういう形式をとらない「遊ぶ」{asoB} のような形式と同等になる。一方、うしろ側を見ると、{ik} は「うしろにいろいろなきまった語尾がつく」という性質を持っている。たとえば Ru がついて 'iku になり、Ta がついて 'iqta になり、maS がついて 'ikimaS に(さらに Ru がつけば 'ikimasu に)なる等々⁴⁾。

大ざっぱに言って、このようなことが {iK} という形式の持っている「職能」である。一つ一つの形式について、こういったたくさんの職能を全部調べあげようというわけである。と言うと非常に膨大な仕事のように響くのであるが——決して簡単な仕事でないことも事実であるが——実はかなり多くの形式がいくつもの同じ職能を共有しているために、一つの形式の職能を調べていくと、ほかのたくさんの形式のことまで一度にわかっていくということがしばしば起こるのである。

たくさんの形式がたくさんの職能を束にして共有している場合に、それらの形式は「品詞」にまとめられる。「名詞」とか「動詞」とか「副詞」とか「連体詞」とかいうのがそれである。しかし「名詞」とか「動詞」とか呼ばれるものの中に、実はいろいろなものがいっしょにはいている。つまり、いくつかの職能は共有していても、ほかにまだいくつかの異なった職能を持っているものがいろいろある。だからそういった職能の異同によ

4) Ru は /ru/ になったり (tabe-ru) /u/ になったり ('ik-u) する語尾。Ta は /ta/ になったり (tabe-ta) /da/ になったり (non-da) する語尾。/q/ は促音。動詞の語尾のつき方については田村すゞ子「文法——活用語」『講座日本語教育』第1分冊(1965)および田村すゞ子「形態論 II」『ことばの宇宙』4 (テック, 1968) 参照。

って、一つの大きい品詞の中の下位分類が行なわれる。日本語に関してはこれが今まだ非常に貧弱である。少しずつ出ているけれども⁵⁾、いまのところ、専門的な文法書の記述よりもむしろ実用的な目的で書かれた外国人用の日本語の教科書のほうが、事実をよりの確にとらえていると思われる場合が少なくない。

職能を調べる場合に、形にばかりとらわれていると、わかるはずのことまでわからなくなることがある。たとえば「無い」{naK_A}という形式は、終止形が /i/ で終わり「無かった」「無く」「無ければ」などと活用する点、「高い」{takaK_A}、「早い」{hayaK_A}などの形容詞と同じである。この点に目をつけてこれを「形容詞」と呼んですましてしまうのでは不十分である。「高い」「早い」「明かるい」「冷たい」などのたくさんの形容詞が持っているのに「無い」が持っていない職能がたくさんあり、一方「行かない」「遊ばない」「いない」等の動詞の否定形を特徴づける職能を「無い」も持っている。さらに、多くの動詞の肯定形と否定形、たとえば「いる」{i}と「いない」{inaK_A}の職能上、意味上の関係と、「ある」{aR}と「無い」{naK_A}の職能上、意味上の関係とがほとんど平行している（“ほとんど”と言うのは、ほんのわずかな違っているところがあるからである。つまりふつうの動詞の否定形のいわゆる -te form には、...nakute と ...na'ide の二つの形があり、両者は用法上も区別がある別の形式であるが、「無い」の -te form は nakute 一つだけである。しかしこれは、個別的なこととして特記すればすむ、小さなことであり、全体的に見れば、上述の関係は平行的であると言える）。しかも「ある」に対しては、規則的な否定形として予測される *「アラナイ」は存在しない。このような場合には、「無い」は「ある」の否定形と考えるのが妥当である（aR+naK_A→naK_A）。なお、「学生じゃない」「静かじゃない」「高くない」などにおける否定の「ない」も、これと同様に、*「アラナイ」の代わりに出る形だということ

5) たとえば寺村秀夫「日本語名詞の下位分類」[『日本語教育』12 (1968)]。

ができる⁶⁾。

このように、一つ一つの形式の機能を調べて、形式相互の機能上の異同を明らかにし、そこに平行関係を見だし、それによって形式を分類するのである。

今回は推量を表わす形式「だろう」「でしょう」およびこれと多かれ少なかれ共通の機能を持ったいくつかの形式を取り上げる。

3. コピュラの活用

「だろう」「でしょう」という形式は、形の上ではそれぞれ「だ」「です」と結びつけられる。「だ」「です」は「コピュラ」あるいは「指定の助動詞」と呼ばれている。一方機能と意味の上から見ても、「だ」「です」と「だろう」「でしょう」は関係がある。たとえば「あの人は学生だ。」「あのへやは静かだ。」という断定文を推量の言い方に直すと「あの人は学生だろう。」「あのへやは静かだろう。」となる。同様に「あの人は学生です。」「あのへやは静かです。」というていねいな断定文を推量の言い方に直す

表

	だ	です	である	であります
終止	da	des-u	de 'ar-u	de 'arimas-u
連体	na; no			
推量	dar-oo	des-yoo	de' ar-oo	de 'arimas-yoo
仮定	nara(ba)	—	de 'ar-eba	(de 'arimas-ureba)
過去	daq-ta	desi-ta	de 'aq-ta	de 'arimasi-ta
条件	daq-tara	desi-tara	de 'aq-tara	de 'arimasi-tara
交替	daq-tari	desi-tari	de 'aq-tari	de 'arimasi-tari
並列	de	desi-te	de 'aq-te	de 'arimasi-te
連用	ni	—	—	—
否定	de wa } na'i zya }	de wa } 'arimaseñ zya }	de (wa) na'i	de (wa) 'arimas-eñ

6) これについては時枝誠記『日本文法口語篇』(岩波, 1950)をはじめいくつかの文献に議論がある。

と、「あの人は学生でしょう。」「あのへやは静かでしょう。」となる。これは一見「あそこの五目そばは高い。」が「あそこの五目そばは高かろう。」に、「午後から雨になる。」が「午後から雨になろう。」に、「あすは雨が降ります。」が「あすは雨が降りましょう。」になるのと平行的であるように見える。

そういうわけでコピュラ「だ」の推量形は「だろう」,「です」の推量形は「でしょう」だと言うことが一応できるわけである。そこでこんどは「だ」および「です」の活用を調べてみる。ここで「活用」というのは、どういう語尾がつくかということである。ついでに、文体によって「だ」「です」にとってかわる「である」「であります」「でございます」の活用も合わせてかかげ、もう一つ参考のために、形容詞として「高い」、動詞として「歩く」とそのていねい形「歩きます」の活用をそえる(表1)。(ローマ字は音素表記。活用形の名称は便宜上仮につけたもの。形容詞や動詞の活用形はまだたくさんあるが、ここにはコピュラの活用形に相当するものだけを並べてある。)

1

参 考

でございます	形 容 詞	動 詞	
de goza'imas-u	taka'i	'aruk-u	'arukimas-u
de goza'imas-yoo	taka-kar-oo	'aruk-oo	'arukimas-yoo
—	taka-ke-reba	'aruk-eba	—
de goza'imasi-ta	taka-kaq-ta	'aru'i-ta	'arukimasi-ta
de goza'imasi-tara	taka-kaq-tara	'aru'i-tara	'arukimasi-tara
de goza'imasi-tari	taka-kaq-tari	'aru'i-tari	'arukimasi-tari
de goza'imasi-te	taka-ku-te	'aru'i-te	'arukimasi-te
—	taka-ku	'aru'i-te	—
de wa } goza'imas-eñ zya }	taka-ku na'i	'aruk-ana'i	'arukimas-eñ

次に、表1でコピュラの活用形として並んでいる形式のうちの主なものの分布(すなわち接続のしかた)を調べてみる。

4. 「だろう」「でしょう」の接続

一つ一つの形式がどんな形式のうしろにつくかを調べてみると、その接続のしかたにはかなり違った点が見られる(表2)。(○印はその接続が自然で問題なく可能なこと、△印は、極めて自然だとは言えないけれども一応可能なこと、×印は不可能なことを表わす。名詞句の代表として名詞の「学生」、副詞句の代表として副詞の「ゆっくり」および他の品詞に語尾や助詞のついた「はやく」「きれいに」「学生から」「学生も」、形容動詞句の代表として単一形容動詞の「静か」、形容詞句の代表として形容詞「大きい」、動詞句の代表として自動詞「歩く」を書いてある。)

いちばん左の欄の「だ」「だった」「だったら」…「でした」「でした」…「である」「でございます」等々は、名詞句、副詞句、形容動詞句につく。名詞句、副詞句、形容動詞句は、コンピュータに関してはほぼ同じ behavior (現われ方、用いられ方) を示すのである。このグループにコンピュータがついて述語を構成するのであるが、最も基本的な述語にはこれ(これを「コンピュータ句」と呼ぶ)と形容詞句と動詞句の三種類がある。これらは「の」または「ん」を伴って名詞句となる。この「の」または「ん」は「名詞化辞」nominalizer と呼ばれる。「の」が現われるか「ん」が現われるかは、文体と次に続くものの形によってきまる。「の」または「ん」によってできた名詞句も、「学生」と同じく、あとに「だ」「だった」「である」「でございます」「でした」「でありました」等々がつく。ところが形容詞句、動詞句の肯定現在形(「大きい」「歩く」)、いろいろなものの過去形(「た」に終わる形)、否定の現在形(「ない」に終わる形)および過去形(「なかった」に終わる形)には、これら「だ」「だった」「でした」などはつかない。これが(つまり表2のIでいちばん上の欄といちばん下の欄に○がつき、それ以外のところに全部×がつくというのが)コンピュータの基本的な behavior である。「なら」と「です」には、これとちょっと違ったところがある。左端の欄で×になっているところに、ところどころ○がついている。「なら」と「です」については、いま詳述しないが、とにかくこれらは特殊なことがらとして

表 2

I	は、だった、な ったら、なっ た。で、でし やたら、でし たり、でして、 でも、であっ た、であります でございます	な	で	す	だろ	う	でし	や	であ	りま	し	ござ	い
学生	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ゆっくり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
はやく	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
きれいに	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
学生から	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
学生も	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
静か	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大きい	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
歩く	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
学生だった	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
ゆっくりだった	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
静かだった	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
大きかった	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
歩いた	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
学生ではない	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
ゆっくりではない	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
静かではない	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
大きくない	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
歩かない	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
学生ではない	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
ゆっくりではない	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
静かではない	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
大きくない	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
歩かない	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×
学生ではない	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ゆっくりではない	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
静かな	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大きい	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
歩く	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
学生だった	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大きかった	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
歩いた	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
学生ではない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
歩かない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
II													
学生です	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
学生でした	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
歩きます	×	○	×	×	×	○	×	×	×	△	△	△	△
歩きました	×	×	×	×	×	○	×	×	×	△	△	△	△
歩きません	×	×	△	×	×	○	×	×	×	△	△	△	△
歩きませんでした	×	×	×	×	×	○	×	×	×	△	△	△	△

個別的に処理することができる。

ところが「だろう」「でしょう」「であろう」「でありましょう」の欄は、I の上から下まで全部○がついている。すなわち名詞句、副詞句、形容動詞句には「だ」を介さないでつくほか、形容詞句、動詞句の肯定現在形にもつき、またコピュラ句、形容詞句、動詞句の過去形、それらの否定の現在形および過去形など、すべてにつく。「でしょう」はさらに述語形式のていねい形(表2のII)のうちの「...です」以外のものにもつく。「だろう」「であろう」「でありましょう」がていねい形につかないあるいはつきにくいのは、文体的特徴が合わないためと解釈できる。

以上で明らかなように「だ」と「だろう」、「です」と「でしょう」は、職能上、形容詞につく「い」と「かろう」と平行関係にはない。これは注目すべきことである。散発的に見られる現象ではないから、特殊なことがらとして処理してしまうことはできない。

たしかに「だろう」「でしょう」「であろう」「でありましょう」が名詞句や副詞句や形容動詞句についた場合には、これらが「だ」「です」「である」「であります」の推量形としての役割を果たすことは否定できない。しかしそれ以外のこれほど違った職能がある以上、これらが「だ」「です」「である」「であります」の推量形であると言ってしまうことはできない。

それにまた、しばしば言われているように、「大きかろう」というような形容詞の推量形は、ごくふつうの口語的な言い方ではない。ごくふつうの口語的な言い方は「大きいだろう」であって、「大きかろう」は「大きいだろう」と重なっている、文体の違う表現だと言える。また §3 であげた例文の「雨になろう」「雨が降りましょう」なども、ごくふつうの口語的な言い方「雨になるだろう」「雨が降るでしょう」に重なっている、文体の異なる表現である⁷⁾。

7) 「雨が降るでしょう」と「雨が降りましょう」について書いたものとして、菅野謙「降るでしょう」と「降りましょう」[『講座現代語6: 口語文法の問題点』(明治書院, 1964)]がある。

時枝誠記博士は、『日本文法口語篇』(1950)の中で、「だろう」を「だ」とは別の一つの推量の助動詞として立てられた。これはまったく正しいと思う。ただそこに書かれている職能の記述は、“体言、動詞、形容詞に自由に接続する”(p. 205)とあるだけで、極めて不十分であり、しかもそこですぐ次の項目として並べられている「らしい」と、この「だろう」とは、本稿 §8 で述べるようにほとんど同じものに接続するにもかかわらず、そこでの時枝博士の両者の接続の記述はかなり違っている。その後この時枝博士の説を受けて、いろいろな人が「だろう」を「だ」とは別の助動詞として扱っている。しかし「だろう」の職能の記述は依然として不十分である。たとえば三尾砂『話しことばの文法』(法政大学出版局, 1958)には、“「だ」の活用形は、助詞化した「なら」のほかは、体言・準体言に接続するか、「な・の」形容詞の語尾になるかで”あるのに対して“「だろう」は動詞・「い」形容詞の基本形にも過去形にも自由について…”と記述されている(pp. 159-160)。最近のものでは、松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』(学燈社, 1969)の助動詞編第6章における外山映次氏の記述は、「だろう」の接続は“活用語の終止連体形だけでなく広く体言・副詞・助詞にも及んでいる”となっていて(p. 222)、ややくわしくなっている。しかし、国文法の記述体系の中で、活用語の終止連体形とされるものの中には、「だろう」のつかないものもたくさんあるし、助詞の中では、「だろう」がつくものは少ししかない。それに、助詞のあとに「だろう」が続いている場合でも、「だろう」はその助詞と結合しているのではなく、名詞句、副詞句その他に助詞がついて(あるいはさらに修飾語や主語などもついて)できたフレーズ全体と統合しているのであって⁸⁾、それを無視してただ助詞に接続すると言ったのでは、文法体系が見えなくなってしまう。

「だろう」は「だ」とは接続に違う点があるから別だ、というだけなら

8) 「だろう」は主語・述語から成る文につき、「…だ」という文についたとき「だ」が落ちるのだと考えられる。しかしここでは表層構造を問題にしている。先に「だろう」が名詞句その他には「だ」を介さないでつく述べたのも、表層構造においての話である。

ば、上述のように「です」および「なら」にもかなり大きな特殊性があるから、別にしなければならないことになるが、文法全体を見わたすと、「です」や「なら」は、上述のようにコンピュータの活用形の一つと見て、それらの持つ特殊性は特記すればよいように思われる。接続に違う点があるというだけでなく、どういう機能を持っているかを明らかにしなければ何にもならない。

表2に関し、もう一つ注目すべきことは、「でございましょう」が「だろう」「でしょう」「であろう」「でありましょう」とは違うということである。ちょっと考えると、この五つは文体を異にするだけで機能は同じなのではないかと思ってしまうそうだが、実際の behavior を調べてみると、「でございましょう」だけが違っている。これはいちばん左の欄の「だ」「だった」「でした」などと同じ接続を示す。つまり「でございます」がつくものにだけ「でございましょう」もつくのである。そして、形容詞句の肯定現在形(「大きい」)以下動詞句の否定過去形(「歩かなかった」)までの諸形式のうしろには「でございます」はつかないが、その穴をうめるものとして、いろいろな表現がある。たとえば *「学生ではないでございましょう」の代わりには「学生ではございませんでしょう」とか、「学生ではございますまい」などの、別の表現形式が用いられる。

もっとも、いま「言う」とか「言わない」とか、あるいは「つく」とか「つかない」とか言っているのは、現代日本語東京方言においてであり、それも私のイディオレクトにおいてである。方言差というものが意外に大きいものだし、こういう微妙な点になると個人差も無視できない。たとえば「大きいでございましょう」「寒いでございましょう」などは、私のイディオレクトにはなく、こういう表現は私には異様に響くのであるが、時枝博士の『日本文法口語篇』の中には、「寒いでございましょう」が、私にもふつうに自然に感じられる他の表現と同列に並べてあげてある。また「学生なの/んなら」「静かなの/んなら」(「の/ん」は「の」または「ん」の意)というような言い方は、私は用いず、その代わりにいちばん上の欄と

同じ「学生なら」「静かなら」という形を用いるのであるが、同じく東京方言の話し手でいっしょに金田一春彦先生はこの「...なのなら」という言い方を、自然な表現としてお使いになるとのことである(しかも私ならば「ん」を用いるところに金田一先生は「の」をお使いになる)。このように、個人差がかなりあるから、私のイディオレクトに認められる事象をもって、“東京方言ではこうである”という断定を下すことはもちろんできない。しかし少なくとも“東京方言の中にこういう事実がある”ということは言える。そこで私の語感やことばの使い方が、東京方言の他の話し手のものと十分同じである(問題にする必要があるほど違ってない)ことをときどき確かめつつ、私自身のイディオレクトを資料として扱っているわけである。文学作品、ラジオ・テレビ放送その他の客観資料を利用する場合でも、自分の方言あるいはイディオレクトを調べるための助けとして利用するのであるから、そこに使われている表現が自分の語感で受け入れられるかどうか、違和感がある場合はどのようにかを確かめることが先決である。異質の方言を混ぜて体系を見失う危険に比べれば、自分のイディオレクトが必ずしも東京方言を代表しないなどは問題とするに足りない。

もう一つ断っておきたいのは、いま「可能で自然」という意味の○と「不可能」という意味の×と、両者の中間である△との三つの段階をもうけたが、○の中にも、まったく完璧で問題なく極めて自然なものから、コンテキストがないとピンとこないものまであり、また×の中にも完全に言えないものから△に近いものまである、ということである。たとえば「大きいだろう」はまったく申し分のない表現であるが「大きいでありましょう」はそれだけ取り出すとちょっとピンとこないので、不自然かもしれないという感じもする。しかしバレーボールの試合の実況放送で「...涙であります。富士見学園、強豪福岡中学をやぶりました。さぞうれいでありましょう...」というコンテキストの中では、たしかに形容詞の肯定現在形+「でありましょう」は使われて少しも不自然ではないのである。また「学生だった」に「だ」がつくことは完全にアウトだが(×「学生だった

だ), これに「です」がつくのは(「学生だったです」), アウトには違いないがそれほどひどく悪くはない。このように, 一般に形式と形式のつながり方のいわゆる grammaticality, つまり文法性, 自然さには, いろいろな段階がある。○や△や×をつけるのは, ある体系を見いだすための便宜的な手段にすぎないことを忘れてはならない。

本論にもどるが, 「でございましょう」の接続が「だろう」「でしょう」「であろう」「でありましょう」と違うというような事実は, 理論を先に組み立ててそこに事象を当てはめていくだけでは, 容易に見見することができないであろう。しかしこれらの形式の behavior を観察調査すれば, 簡単にわかることなのである。

5. 「...であろう」「...でありましょう」「...でございましょう」の構造

「でございましょう」の接続がこのように「だろう」「でしょう」などとは違い, 「でございます」のつくものにしかつかない, ということは, 次の統語法的解釈とうまく合う。すなわち, 「でございましょう」は実は「だろう」のように一かたまりになって前の形式と統合するのではなく, 「...でございます」の場合と同様に, 前の形式に「で」がつき, 「——で」全体に「ございましょう」がつく(あるいは「ございま S」がつき, 「——でございま S」に Yoo がつく)のである。このことは, 「で」と「ございましょう」の間に「は」「も」などあるいくつかの助詞がはいり得る(「不便ではございましょうけれども」「不便でもございましょうし」)ことから支持される。ここでは「だろう」「でしょう」が現われると同じ線的位置に, ある違った文体で「はでございましょう」がこれに代わって現われるという理由で, 単に比較するための便宜上, 同じ表に入れてあるのである。

「であろう」「でありましょう」においても, 「で」と「あろう」「ありましょう」の間にある種の助詞がはいり得る場合がある(「不便ではあろうが」「不便でもありましょうし」)。そういう場合は「...であろう」「...

でありましょう」というフレーズは、「...である」と(つまり上述の「...でございましょう」と)同じ構造を持っていると解釈すべきである。しかし、「大きいであろう」「歩くでありましょう」のように、「である」のつかないものに「であろう」「でありましょう」がつく場合は、「で」と「であろう」「ありましょう」の間には何もはいることができないのである。その場合は「...であろう」「...でありましょう」というフレーズの構造は「...である」のそれとは違い、「であろう」「でありましょう」が、「だろう」「でしょう」と同様に一かたまりをなしていると考えられる。つまり「...であろう」「...でありましょう」というフレーズには、二つの違った構造があるのである。上述の「...でございましょう」の場合は、常に「で」と「ございましょう」の間に構造上の切れ目がある。

さて「だろう」「でしょう」「であろう」「でありましょう」の四者のうち、現代日本語東京方言のふつうの話しことばで用いられるのは「だろう」と「でしょう」の二つだけである。「であろう」は主として論文調の書きことば、「でありましょう」は主として演説用語である。だからこれから先は「だろう」と「でしょう」の用法を中心に見ていくことにする。

6. 「...だろう」「...でしょう」のうしろの接続

これまで「だろう」「でしょう」などがどんな形式のうしろにつくかを見たわけであるが、こんどは「だろう」「でしょう」におわるフレーズの職能、つまりそのうしろには何がつくかということを調べてみよう。

「...だろう」「...でしょう」というフレーズは、第一に文末に立つことができる。

第二に、そのあとにいろいろなものがつくことができる(表3)。まず終助詞の類についてみると、「よ」「ね」「か」がつくことができる。「とも」や「に」もつく。この「に」は「...だろう」「...でしょう」の仲間(これと重なって、違った文体でこれに代わって現われる「...かろう」「...たろう」なども含む)にはつくが、それ以外の文末述語形式にはつかない。

表 3

	よ	ね	か(文末)	かしら	かどうか	は	な(名詞)	ごと	や	か(助詞)	に(助詞)	を(助詞)	から	けれども	が	ら(助詞)	ら(助詞)	ら(助詞)
学生だ	○ M	② F	② F	② F	② F	② F	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
大きい	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
歩く	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
歩かない	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
…だろう	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
…でしょう	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
…だろう	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
…だろう	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
歩こう(意志)	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
歩きましょう	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
歩け	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
歩きなさい	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
…からしれない	○ M	② F	② F	② F	② F	② F	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
…からしれません	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
…にちがいない	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
…にちがひありません	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
…にすぎない	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
…にすぎません	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
…らしい	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
…らしいです	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	△	×	×
…じゃない(か)	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
…じゃありませんか	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
…かしら	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
…か	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
…さ	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×
…やら	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○ M	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×

M：男性語

F：女性語

②：「か」を介してつく

③：「だ」をゼロに変えてつく

④：「だ」を「の」に変えてつく

⑤：「だ」を「な」に変えてつく

「...だろう」には「さ」やひとりごとの「な」もつく。「さ」や「な」が「...でしょう」につかないあるいはつきにくいのは文体が合わないからだと考えられる。つまり「さ」は「でしょう」が使われるようになっていない、やさしい、あるいは女性的な文体の中ではふつう用いられないものである。しかしもし「さ」が用いられるような場面で「でしょう」が使われたとしたら、「...でしょうさ」という発話が、不自然さを伴わずに行なわれることであろう。また、ひとりごと、それも自分に向かって話しかけるのではなく声を出して考えるという種類のひとりごとの中では、「です」や「ます」を使わないと同様「でしょう」も使わないものであるから、「...でしょうな」は起こり得ないわけである(年配の男性が用いる「...でしょうな」の「な」はいま問題にしているものとは別のもので、上述の「ね」に相当する)。自分に向かって話しかける場合の「です・ます」体のひとりごとの中では「な」ではなく「ね」を用いて「...でしょうね」となる。

第三に「...だろう」「...でしょう」には、「ぞ」と「わ」はつかない。また「かしら」はつかないか、少なくともつきにくい。文末で「か」がついて質問文になるのはいいけれども、「...かどうか」とか「...かないか」とかいうパターンにはいることはできない(「...だろうかどうか」「...でしょうか...ないでしょうか」などは可能だが、構造が異なる)。「やら」もつかない。これらの点で、断定の、RU や Ta に終わる形式(「だ」「だった」「です」「でした」や、形容詞や動詞の肯定・否定の現在形や過去形などに終わる形式)と異なり、意志・勧誘の Yoo, mas-yoo に終わる形式(「歩こう」「歩きましょう」と似ている。(なおこの「やら」は「...かどうか」とよく似た behavior を示すらしいが、私のイディオレクトの中では堅固な存在ではない。表3で「やら」のところに×がたくさんついているのはそのためである。)

第四に「...だろう」「...でしょう」は文末だけでなく、接続助詞「から」「けれども」「けど」「が」などの前にも立つ。たとえば

- 声をかけてやればきっと喜ぶだろうから、ちょっと電話してみたら？
- そう言えば来るでしょうけど、ほんとにそんなこと言っていいかしら。
- 第五に場合によっては連体修飾成分となることもできる。
- 彼が知らないだろうニュースを書いて送ってあげよう。
- 養生すればもっと長生きできただろう人が...

しかしこの用法はあまり自由ではない。しかもこのパターンを使うのは、何か特別のニュアンスをめざしている場合である。特別のニュアンスのない、もっとたいらな言い方としては、たとえば

- このニュースは彼は知らないだろうから書いて送ってあげよう。
- あの人には養生すればもっと長生きできたでしょうに...

のように別の構文を用いたり、あるいは「だろう」「でしょう」を使わずに「きっと」「はず」などを使って表現したりすることができる。

この第四、第五の点(中でも特に第四の点)は、RU や Ta に終わる断定表現の形式に似ていて、意志・勧誘の「歩こう」「歩きましょう」などと違う点である。

第六に、「...だろう」「...でしょう」は、名詞化辞 nominalizer の「の/ん」によって名詞化されることはとない。またこれと平行して「ので/んで」や「のに」の前に立つことができない。「から」は上述のように「...だろう」「...でしょう」のあとにつくことができるけれども「ので」はつくことができない。たとえば「知らないだろうから」は言えるが*「知らないだろうので」は言えない。*「知らないだろうのに」も言えない⁹⁾。この第六の点では断定の RU, Ta に終わる形式と違い、意志・勧誘の Yoo, masyoo に終わる形式や命令の形式などとやや似ている。

7. 「だろう」と「でしょう」の関係

§6 のはじめに、「...でしょう」に「さ」が付きにくいことの説明とし

9) このことについては、浅見徹「カラとノデ」[『講座現代語 6: 口語文法の問題点』(明治書院, 1964)]の中に言及がある。

て文体が合わないということを言い、「でしょう」はていねいでやさしく女性的だと言ったが、「だろう」と「でしょう」の違いはどこにあるのだろうか。

「普通形」「ていねい形」という用語をいま仮に採用すると、

普通形	ていねい形
学生だ	学生です
大きい	大きいです
歩く	歩きます
学生だろう	学生でしょう
大きいだろう	大きいでしょう
歩くだろう	歩くでしょう

ということになるであろう。しかしこの並べ方は果して適当であろうか。だいたい普通形とていねい形との違いは何なのか。

第一に、連体修飾節の述語としては普通形、すなわち「です」「ます」のつかないものが立つほうが基本的である。「です・ます」体の文の中でも、連体修飾節の述語には普通形を用いるほうがたいらな表現である。たとえば「歩きます人」よりも「歩く人」のほうがたいらな表現である。「歩く人」のほうが基本的なパターンで、「歩きます人」のほうは、特別なていねいさをめざして言うときに「歩く人」の代わりに用いられるパターンであると言うことができよう。「の/ん」によって名詞化される節の述語にも普通形を用いるほうがたいらである。「から」「けれども」などに続く場合は、文末が「です」「ます」のとき「大きいですから」「歩きますけれども」のように「から」「けれども」の前にもていねい形が現われるほうがむしろたいらであるが、普通形も立ち得ないわけではない。「ので/んで」「のに」の前では、いっそう普通形が立ちやすい。「...と思います」などの「と」の前には、「大きいと思います」「歩くと思います」のように、普通形がいるほうがたいらである。

非常に大ざっぱな言い方をしたが、とにかくこのように、文中の位置に

よって規制されることがある。この点では、「だろう」と「でしょう」の関係は「だ」と「です」、「歩く」と「歩きます」の関係とだいたい平行していると言ってさしつかえない(平行していない部分もなくはないがいま詳細は省く)。ところが文末の述語として用いる場合は、やや事情が異なる。

文末の述語に普通形、ていねい形のいずれを用いるかが、その文全体の文体を最も大きく左右する。文末に「です」「ます」を使うのは、話し手の、相手に対するある態度を示すものである。どういう態度かという、尊敬するとか敬うとかいうことではなく、一口に言えば、人間関係における距離を遠くしておく、ということだと思う¹⁰⁾。目上の人、初対面の人、顧客などに対して、ふつう主に「です」「ます」を使うのは、相手にむやみに近付かないのが礼儀だからであろう。目上の人でも、先生や上司などは別として、単なる先輩とか年上の親戚などであれば、親しくなるにつれて、普通形の文体を使うようになる傾向がある。お見合いの席の男女はふつう「です」「ます」を使うが、三回ぐらいデートを重ねると「です」「ます」はときどき落とされるようになり、いよいよ結婚するころにはもう「...だよ」「そうね。」などと言って、「です」「ます」などは使わなくなってしまう(言うまでもなくこれは一つの比喻である。すべてのカップルが同じ経過をたどるというわけではない。他の例も同様)。これは尊敬の念が薄れるのでもなければつつしみがなくなるのでもなく、親密になるために「です」「ます」を使わなくなるのだと思う。一方聞き手の反応について考えてみると、私は女だから男の気持ちはわからないので女の気持ち

10) 「です・ます」体よりもいっそうていねいな文体である「ごさいます」体は、単に相手との間に距離を置き formal にするだけではなく、相手(聞き手)に対して自分(話し手)がへりくだる(相手を自分より上に上げる、と言うほうが適切かもしれない)という要素があると思う。「ごさいます」が「ていねい語」と言われながらもゆるい「謙譲語」の一種たる「いたします」「まいります」「たぐいに非常に近い感じがするものことからうなずける。つまり「いたします」「まいります」のたぐいは、行為主体を自分と同じ高さに置き、相手(聞き手)を自分(話し手)より上に上げるものであるから、自分と相手との関係は「ごさいます」の場合と同じで、しかも自分がすなわち行為主体である場合は、「ごさいます」と「いたします」「まいります」のたぐいにおける人の上下関係はまったく同じになる。しかしいまは話を簡単にするため、「ごさいます」体を考察の外に置く。

について言うと、いままで自分に向かって「...ですよ。」「...しましたか?」と言っていた男性がある日のこと「...だよ。」「...した?」という言い方をしたとき、もしその男性に好意を持っていれば、間をさえぎっていた壁がとれて心が直接通い始めたようなしあわせを感じるし、もしその男性をきらっているならば、いやになれなれしい口のきき方をして、まあずうずうしいと思う。そんなとき女性は「まあ、さようでございますか。ちっとも存じませんでしたわ。」などと、最高級のていねいな文体で応じることにより、私はあなたなんかと親密になりたいはございませんという意志表示をするかもしれない。逆に自分の好きな男性がいままで「...だよ。」「...した?」という普通形の文体で話しかけてくれていたのに、ある日どうかして「です」「ます」を使ったりすると、何かよそよそしくされたようなさびしさを感じる。また、親が子どもに向かって、親しい気持ちでものを言うときは、「いい?」「おりこうね。」「行くわよ。」のように言うのがふつうだが、こごとを言うときは、「いいですか!」「悪い子ですねえ。」「ぐずぐずしてると先に行っちゃいますよ!」のように、「です」「ます」を使って効果を出すことがある。これは親が子どもを敬うのでもなければ子どもに対してつつしむのでもなく、子どもとの間に距離をおいてものを言うのだと思う。formal,あるいは折り目正しい言い方というふうにも言えよう。だから初対面の人や顧客に対しては「です」「ます」を使うし、ふだんは「ばかやろう、おまえだよ。はやくしろよ。」などと言っている小学生どうしでさえ、児童会という formal な席では「です」「ます」の文体で話すのである。

ところが「だろう」と「でしょう」の使われる場合を考えてみると、親が子どもに向かって、親しい気持ちでものを言うとき、「いいだろう。」と言うだろうか、それとも「いいでしょう。」と言うだろうか。母親ならば必ず「でしょう」を使うだろう。父親ならば「だろう」を使うこともあるだろうが(特に子どもが男の子の場合)、「でしょう」を使うこともあるだろう(子どもが男でも女でも)。お見合いのあと三回ぐらいデートして「です」

「ます」使わなくなった男女も、「だろう」よりは「でしょう」を使うのではなからうか。もっとずっと親しくなって、結婚するところにでもなれば、男性のほうは「だろう」を使うことも多くなるかもしれないが、それでも「でしょう」も使うだろうし、女性のほうはずっと「でしょう」ばかり使うのではないだろうか。

参考のため、私の身近な人々が私に向かって話すときに、判断文(仮称。文末に「だ」「い」(形容詞語尾)「Ru」「です」「ます」およびその過去形、否定形などを持つ文。「...だね。」「...ましたか?」などを含む)と推量文(仮称。文末に「だろう」「でしょう」を持つ文。「...だろうね。」「...でしょうか?」などを含む)において、文末に普通形とていねい形のいずれを用いるかを観察した結果を報告する。

A—O はいずれも成人で東京方言の話し手。

A, B は兄弟。C は夫。J は母。

D, E, K, L は学生時代からの親しい友人。F, G, H, I, M, N, O は学校を出て以後に知り合った先輩、同輩、後輩。

A, C, D, F, G, H, J, M, N は年上。K は同年。B, E, I, L, O は年下で年令差は3年以内。

普通形を1, ていねい形を2で表わす。

男 性			女 性		
	{1. (だ) 2. です	{1. Ru 2. ます		{1. (だ) 2. です	{1. Ru 2. ます
					{1. だろう 2. でしょう
A	1	1	J	1	2
B	1	1			
C	1	1			
D	1	1	K	1	2
E	1	1	L	1	2
F	1	1	M	1	2
G	2	2	N	1	2
H	2	2	O	1	2
I	2	2			

この表からただちに、判断文における文末の「だ」と「です」の分布と

「Ru」と「ます」の分布とは平行している(表に現われない小さいずれがあるがいまは省略する)が、推量文における文末の「だろう」と「でしょう」の分布はこれとひどくずれていることがわかる。

女性は判断文では文末に「です」「ます」を使う文体から普通形の文体への移行が男性よりずっと早い。この表にはいっているような、同輩や先輩や近い後輩は、早くは初対面のとき、遅くても数回目には普通形の文体へ移行する。ところが男性においては、この移行が比較的起こりにくく、年をとってから(学校を出てから)の友人、知人の大部分は、年上、年下を問わず、知り合って数年たっても「です」「ます」を使っている。しかし若いとき(学生時代)からの友人は、年上、年下とも、普通形を用いている。学生どうしのことば使いがそのままいままに続いているのである。

一方推量文においては、女性は文末には常に「でしょう」を用いる。「だろう」を使うのはわざと男性語をまねるときぐらいなものである。男性でも「だろう」を使うのは兄と弟だけで、家族であっても夫は「でしょう」をより多く用い、他人は、学生時代から親しい友人を含めて、みな「でしょう」を用いている。

以上のことは、この表に出ていない人たちにおいてもそっくり当てはまる。要するに、少なくとも女性に向かって話す場合は、「だ」「RU」と「です」「ます」の関係と、「だろう」と「でしょう」の関係とは、非常にずれているのである。

相手が男性の場合はもちろん違った結果が出るに相違ない。女性から男性へ話す場合は、判断文において文末に普通形を使う文体への移行が、女性どうしの場合よりも多少起こりにくい。男性どうしの場合は、男性から女性に向かって話す場合よりは、この移行が起こりやすいだろう。推量文でも恐らく「だろう」がもっと多く使われることであろう。これは男性によってこの種の調査が行なわれればはっきりすることである。しかし、判断文ではもっぱら普通形を用いて話している男性どうしの会話をはたで聞いていると、推量文では「だろう」ばかりでなく「でしょう」もしばしば

使われているのである。

従って話し手および相手の性がいずれであっても、「だろう」と「でしょう」の関係は、「だ」「Ru」と「です」「ます」の関係とは平行していないのである。前に、「でしょう」はていねいでやさしく、女性的であると言い、「です」「ます」は人間関係における距離を遠くする、formalで折り目正しい言い方だと言ったのは、このことだったのである。「ていねい」という点では「でしょう」と「です」「ます」は一致しているが、「でしょう」はあまり formal な折り目正しい言い方ではなく、また「です」「ます」は特に女性的な言い方ではない。このようなことも、形がほぼ平行的だから意味も平行しているものと決めてかかっているのは、見のがしてしまうであろう。

8. 「だろう」「でしょう」と共通の機能を持つ形式

「だろう」「でしょう」がつくとほとんど同じものにつく形式がいくつかある。表3の「かもしれない」以下にあげたものはすべて、表2のⅠに関しては「だろう」「でしょう」と同じ接続をする(この中には一まとまりの形式ではなくて内部に構文法上の切れ目を持つものもある)。

そこでこんどは、これらの諸形式(ないしは形式の連なり)で終わるフレーズの機能、つまりこのうしろ側には何がつくかということを調べてみる(表3)。

いちばん下の「...やら」のところは全部×がついている。「やら」は基本的には文末に立つものではなく、そのあとにある種の表現が続くものである。

「...かしら」「...か」「...さ」は文末に立つものだが、そのあとの接続は「な」(「か」のあと)、「ね」を除いて×になっている。「...か」と「...さ」には「ね」もつかないほうが基本的ではないかと思う。「...かしら」には「ね」だけは立派につくことができるがそれ以外は何もつかない。横道にそれるが、「終助詞」の名称のもとに一括される形式は、ほか

にも「よ」「ね」「わ」「ぞ」等々たくさんある。しかしその大部分は「だろう」「でしょう」とは違った接続をする。たとえば「よ」「ね」は、男性語では「学生」「ゆっくり」「静か」などのあとに「だ」がついたものにつくし、女性語では「大きい」「歩く」などのあとに「わ」を介してつく。

その上の「...じゃない」「...じゃないか」「...じゃありませんか」は、言うまでもなく。「子どもじゃないわよ。」の「じゃない」ではなく、「いいじゃない?」「来たじゃないか!」「動かないじゃありませんか。」という言い方の「...じゃない」である。「...じゃないの」もある。より formal には、「じゃ」の代りに「では」が現われること、「子どもじゃないわよ。」の「じゃない」と同様である。これは「よ」と「ね」がかるうじてつくことができるようだが、あとはつかない。

ここまでは×がたくさんついている。ということは、文末に使われるだけで、あといろいろなものへ続いていかない、その節がより大きい文の要素としてはめこまれることもない、ということである。

最後に「...かもしれない」から「...らしいです」までのところを見ると、○と×のつき方がよく似ている。普通形は普通形どうし、ていねい形はていねい形どうしで比べてみるとほとんど同じである。「...かもしれない」だけが「か」「かしら」「かどうか」がつかないあるいはつきにくい点でほかのと違っているが、これは文法的に許されないわけではなく、意味が合わないため、と言って説明できると思う。特殊な場面があれば「...かもしれないかしら」もあり得るだろうと思う。

次にこの「...かもしれない」から「...らしいです」までを「...だろう」「...でしょう」と比べてみると、やはりだいぶ違っている。「...だろう」「...でしょう」には「かしら」と「かどうか」はつかないが、下のグループにはだいたいつく。「ぞ」「わ」も「...だろう」「...でしょう」にはつかないが下のグループにはつく。名詞の前に置かれるかどうか、すなわち連体修飾節になるかどうかという点では、§6 で述べたように、「...だろう」はまれには連体修飾節にはいれるけれどもあまり自由では

ないのに対し、「...かもしれない」以下のグループはもっと自由に、もっと自然に、連体修飾節にはいることができる。

○来ないかもしれない人を3時間も待っている。

このことに関連して、このグループは、「...だろう」と違って、「の」「ん」によって名詞化されることができるし、「ので/んで」や「のに」の前に立つこともできる。

○来ないかもしれないのを知っていた。

○来ないかもしれないんだ。

○来ないかもしれないので...

○来ないかもしれないのに...

同じ形式に接続するものでも、それが接続してできた形式の機能には、これほどの違いがあるのである。

こんどは「...かもしれない」「...にちがいない」「...にすぎない」「...らしい」を、いちばん上の四つと比べてみる。いちばん上の四つは、コピュラ句(「学生だ」)のところで「だ」がゼロになったり「の」になったり「な」になったりする以外はそろっている。表に出ていない「学生だった」「大きかった」「歩いた」「学生じゃない」「大きくない」「学生じゃなかった」「大きくなかった」「歩かなかった」等を含めて、コピュラ句、形容詞句、動詞句の肯定、否定の現在形、過去形のすべてにおいて、うしろにつくものは、既に指摘した点を除いては、同じである。こういう職能上の共通性に伴って、意味上も共通性が認められる。そろわないのは形の面だけである。そこで、形が違っても実はこれらには共通の語尾がついているのだと解釈する。言いかえれば、同一の形式が、何につくかによって違う形をとって現われているのだと見なすのである。現在形の語尾をRU、過去形の語尾をTaで表わすと、たとえば形容詞句や否定の「...naK_A」、つまりK_Aで終わっているものにRUがつくと、RUはiという形をとって現われ(「大きい」「歩かない」)、Taがつくと、K_Aはkaqとなって「...かった」「大きかった」「歩かなかった」という形をとる、と説明す

る。過去形においては Ta のあとにさらに現在形と共通の語尾 RU がついている、という解釈もできる。

「...かもしれない」「...にちがいない」「...にすぎない」「...らしい」のうしろの接続をこれら RU, Ta で終わっているものと比較すると、「...にすぎない」のうしろの接続はこれらのそれと完全に同じ、他の三者も非常によく似ている。「...にちがいない」「...らしい」は「やら」がつかないかあるいはつきにくい点だけ上のものと異なる。「...かもしれない」は、それに加えて先述の「か」「かしら」「かどうか」がつかない、あるいはつきにくいという相違点がある。しかしこれらの相違点はいずれも、文法上許されていないというよりも、意味が合わないためにつかないあるいはつきにくいのだと言って説明できるものと思われる。「...かもしれない」「...にちがいない」「...らしい」は三者とも推量の意味を有し、この点「...だろう」と共通性がある。

ところで「...かもしれない」「...にちがいない」「...にすぎない」「...らしい」の職能をもうすこし広げて考えてみよう。このグループは「...かもしれなかった」「...にちがいなかった」「...にすぎなかった」「...らしかった」のように、「い」を取り除いて「かった」をつけることにより過去形にすることができる。また「...かもしれなくて」「にちがいなくて」「...にすぎなくて」「...らしくて」のように、「い」を取り除いて「くて」をつけることにより -te form にすることができる。また「...かもしれなければ」「...にちがいなければ」「...にすぎなければ」「...らしければ」のように、「い」を取り除いて「ければ」をつけることにより仮定形にすることもできる(もっとも「...かもしれなければ」はやや起こりにくいであろう。このように活用の自由さの度合いも形式によって多少違いますが、いまはもっと巨視的に見ていく)。つまり形容詞型の活用をする。またうしろには表3に出ているもののほかにも、「なら」や「だろう」「でしょう」もつき、意味さえうまく合えばこのグループの中の他のメンバーもつくことができる(「...にすぎないらしいかもしれない」)など、いちば

ん上のグループと同じものがつくことができる。従ってこのグループは K_A に終わる語幹に RU がついていると見ることができる。

これに反し、「...だろう」には RU はついていない。「...だろう」は過去形も否定形も作らない、無活用形式である。もちろん「...でしょう」も、また異なった文体でこれらにとって代わる「...であろう」「...でありましょう」「...でございましょう」「...かろう」「...たろう」も同様である。そしてこれらは、形の上で似ている意志・勧誘の「...Yoo」「...ましょう」とも全然違った、それ自身の特徴的な機能を持っているのである。

9. 「...かもしれない」「...にちがいない」などの構造

最後に、「かもしれない」「にちがいない」「にすぎない」「じゃない」などを、なぜこんな長いかたまりのままで問題にしているのかという点に、簡単に解れておく。

「かもしれない」(正確には語尾 RU を除いた部分、すなわち「かもしれない naK_A 」)は、形の上から見ると、助詞の「か」、助詞の「も」、動詞の「しれる」すなわち「知る」の可能形、否定の「ない」すなわち naK_A から成り立っているように見える。実際、「かもしれない」の接続は上述のように「か」の接続と同じであるし、意味の上でも「かもしれない」には「か」の疑問の意味が含まれているから、「か」という要素を取り出すことはできる。一方「かもしれない」「かもしれません」という、動詞の否定形と同じ普通形「...ない」「...ない形」「...ません」の対をなしているから、 naK_A も取り出し、同時に「しれ」の部分も一つの形式と見なければならぬ。そうすると「も」が残るからこれも一つの形式と見られる。従って「か」「も」「しれ」「 naK_A 」と分析することは一応妥当だと言える。ところが「かもしれない」「かもしれません」には、対応する肯定形がない。たとえば *「歩いたかもしれる」*「歩いたかもしれた」*「歩いたかもしれます」*「歩いたかもしれました」などは全然ない。従って

歩いたかもしれ

nak_A RU

のような構造ではなくて、「しれない」「しれません」が一かたまりになっているのだと言わなければならない。

さらに、「かもしれない」の「も」の部分をも落としたり、ほかの助詞、たとえば「は」「だけ」などに変えたりすることはできない。*「歩いたかしれない」*「歩いたかだけしれません」などはない(「どんなに心配したかしれない」などは意味が異なる,「...かもしれない」とは別のパターンである)。「か」のあとに「も」が来ないと,「しれない」に続いていくことができない。しかも「...かも」と来るとそのあとに続くのは「しれない」「わからない」「しれません」「わかりません」ぐらいのもので,ふつう「も」のあとに来るいろいろなものが,「...かも」のあとには自由に立つことができない。「しれない」「わからない」の部分を省略して「かもね」とか「かもよ」とか言っても通じるのはこのためである。

こういう状態であるから,「歩いたかもしれない」の構造は

歩いた か も しれ
nak_A

ではなくて

歩いた

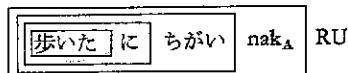
か・も・しれ・nak_A RU

だと解釈しなければならないと思う。

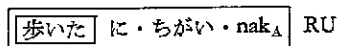
「にちがいない」についてみると,「歩いたにちがいない」「歩いたにちがいありません」となるから,「ない」{naK_A}の部分を取り出せる。そしてこの「ない」は,「かもしれない」の「ない」と違って,「ある」の否定形,つまり*「アラナイ」の代わりの「ない」だということがわかる。次に「歩いたにはちがいないけど...」のように,「に」のあとに「は」という助詞がいることができるから,「に」と「ちがい」との間に形態素の切れめがあることは確かである。また「ちがい」は「違う」と形の上からばかりでなく意味上も結びつけられる。「...に相違ない」などとも言う

からこれはいっそう確かである。このようなわけで「に」「ちがいが」「naK_A」の三つ(語尾の RU を入れれば四つ)の部分に分析できるわけである。

しかし、助詞の「に」は、ふつう、表2の左端の項目にあげたような、「大きい」「歩く」「歩いた」「歩かない」「歩かなかった」等の、RU, Ta に終わる形式にはつかない。こういうものにいったん「に」がつくと、そのあとに来るものは「ちがいない」「相違ない」「すぎない」「こしたことはない」「限る」「もかかわらず」「しても」「しては」などの、ごく限られたものに決まってしまう。また *「歩いたにちがいはない」*「歩いたにちがいでなかった」等、「ちがいが」と「ない」の間には、ふつうよく名詞と「ない」の間にはいるような「は」「も」「だけ」「だって」等々の助詞がはいることはいできない。従って「歩いたにちがいない」の構造は



ではない。それならば上の「歩いたかもしれない」と同様に



という構造なのであろうか。

これもいい解釈ではない。というのは、第一に「にちがいない」の「に」と「ちがいが」の間の切れ目は、「かもしれない」の「か」と「も」の間の切れ目よりもずっとはっきりしている。たとえば上に触れたように「歩いたにはちがいない…」のように間に助詞がはいることもし、また「歩いたに」のうしろには「ちがいない」だけではなく「相違ない」「すぎない」「もかかわらず」「しても」「しては」等、いろいろなものが続くこともできる。第二に「にちがいない」は必ず何かのあとに続いてのみ現われる。「かもしれない」や「だろう」「でしょう」は

○“鈴木さん怒ってるかしら。”“かもしれないわね。”

○“鈴木さんきっと怒ってるわよ。”“でしょうね。”

のように、前の部分が省略されて、文頭に立つことがあるが、「にちがいない」にはこういうことはない。一方、場面によっては「…にちがいな

い」の「...に」の部分が省略されて「ちがいない」が文頭に立つこともなくはない。

結局、「にちがいない」の「に」はその前の部分に直接つく助詞で、そのあとに構造上の切れ目があると解釈すべきであろう。つまり「歩いたにちがいない」の構造は

歩いた	に	ちがい・nak _A	RU
-----	---	----------------------	----

であるというわけである。

ただ注意しなければならないのは、先に述べたように、この「に」を、ふつうの格助詞の「に」(「学校にいる」「3時に出かける」と同一視してすましてしまうことはできないということである。私の解釈では、「歩いた」と「ちがいない」とが統合するときに、「に」が要求されて出て来て「歩いた」のあとにつくのである(もちろん「歩いた」でなく「学生」「大きい」「歩く」等々でも同じことである)。構造上は「ちがいない」のほうではなく「歩いた」のほうにつくのであるが、しかし「に」が「歩いた」につくのは「に」そのものの性質によるのではなく、「ちがいない」によって要求されるからである。従って「ちがいない」を問題にするときは、これが要求する「に」もいっしょに考えなければならない。これはちょうど、外国人に、たとえば「乗る」という単語を与える場合に、「(電車、飛行機、馬)に乗る」という、「に」を伴う使い方を教えなければならないのと同じことである。